繪本豐臣勲功記　八十一

繪本豐臣勲功記 九編 壹

197
90
254

櫻澤堂山編輯
松川半山畫圖

繪本豐臣勲功記 九編

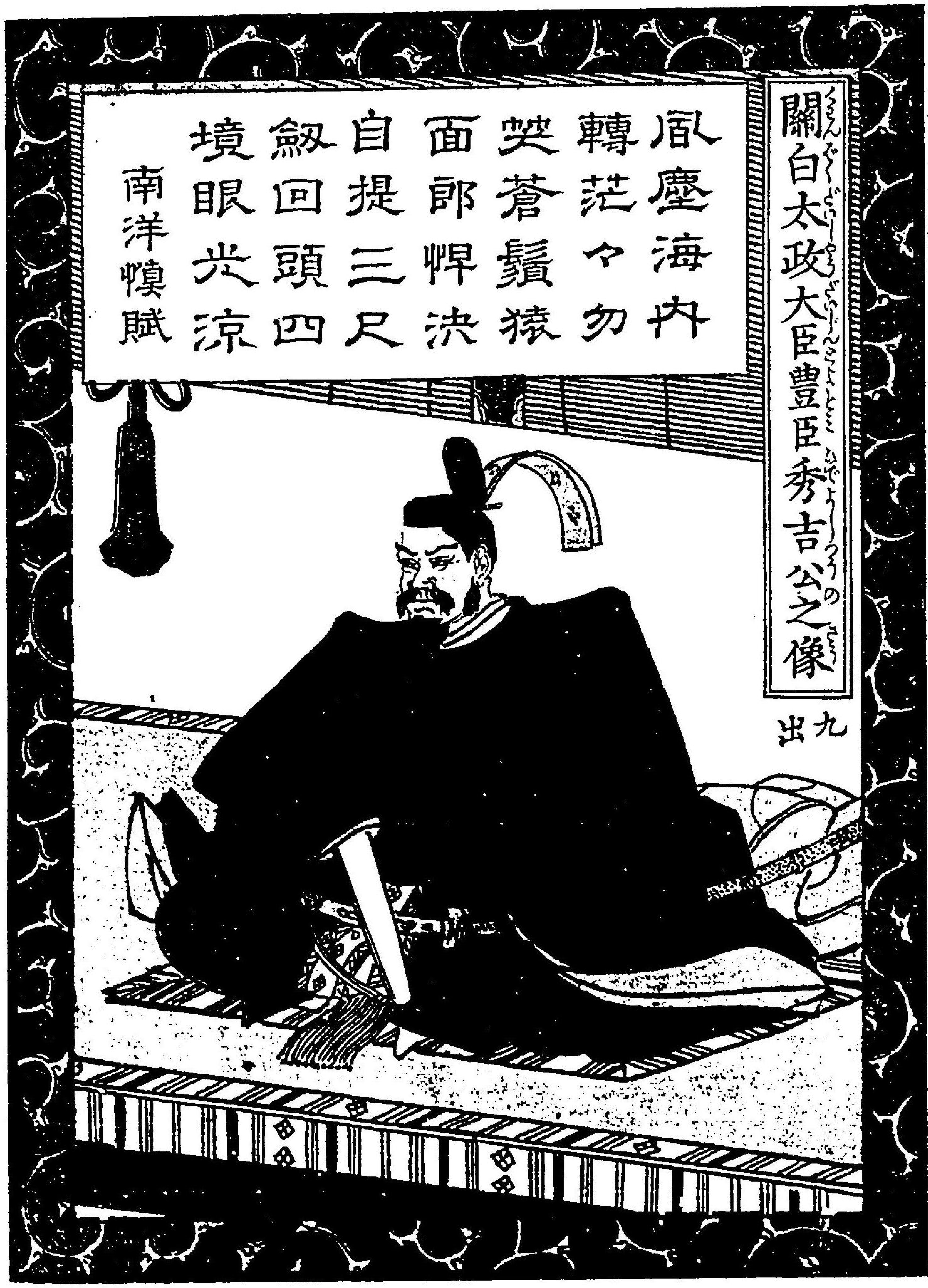
大阪書林
羣玉堂
文海堂

東京圖書館

威輝於宇内

名垂於海外

玉雲書


關白太政大臣豐臣秀吉公之像
凮塵海内
轉茫々匆
變蒼鬚猿
面郎悍決
自提三尺
劒回頭四
境眼光涼
南洋愼賦
九
出

島津義久入道龍伯之像
蟠屈西海勢
堂々虎嘯龍
飛幾戰場一
見猿郎無氣
力却多抛劒
拂禪林

從三位宰相源義弘之像
將家将起
勢愈震
南國復看
馬援倫
海變為田
寧負意
自題金柱
表精神

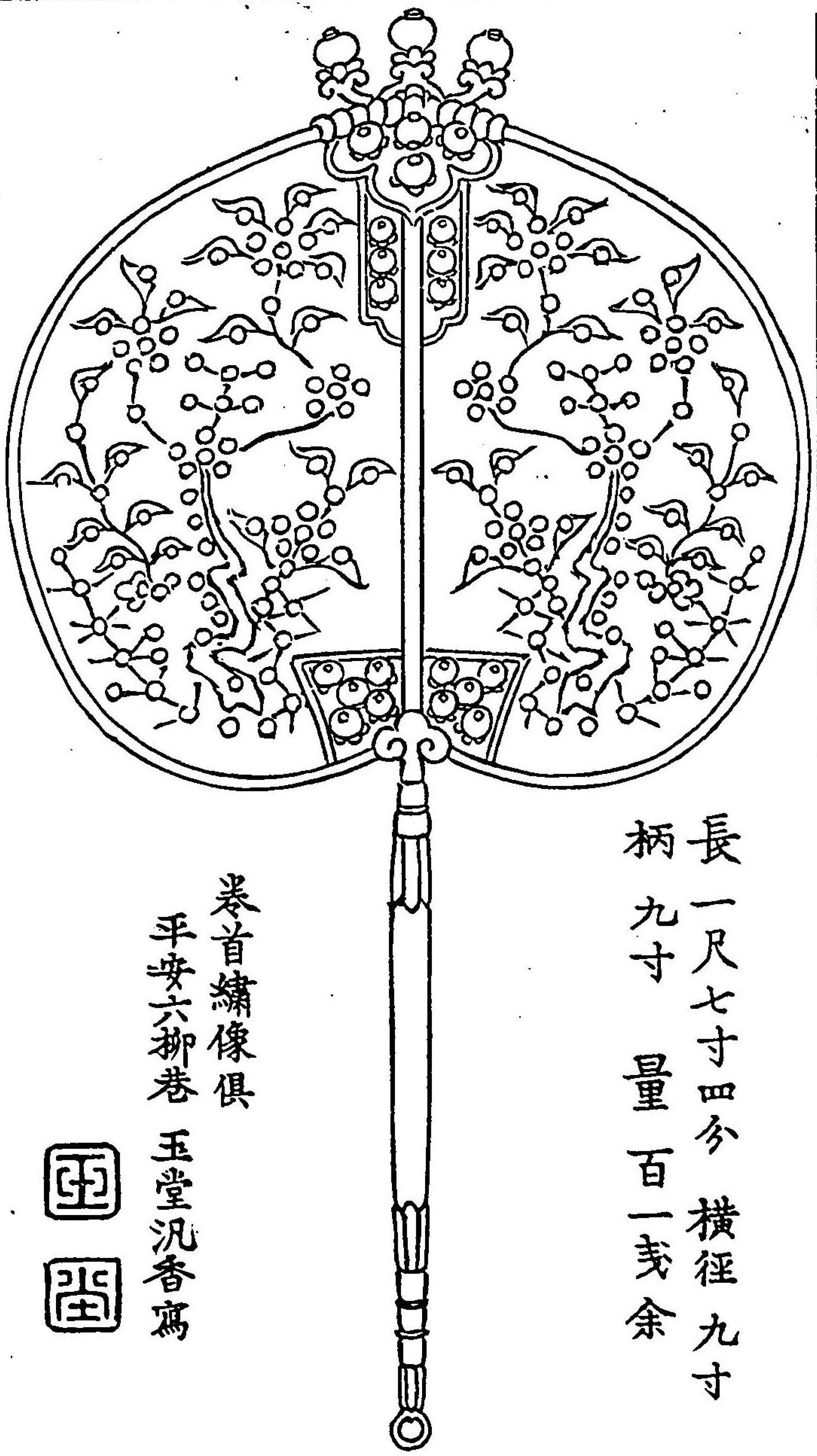
新納武藏守忠原之像
瞿然俊
傑獨龍
驤
頗與一
人軍勢
張
英主棄
櫬降敵
日
手猶按
劍叱猿
郎

豐公遺物軍配扇之圖

京師大佛妙法院藏

長一尺七寸四分　横徑九寸

柄九寸　量百一戔余



柄及ヒ輪等黄金ニシテ赤地ノ織物ヲ以テ團面ヲ張金絲ニテ唐花ヲ繡シ其葉上ニ各細粒ノ真珠ヲ綴ル中央并頭ニ大粒ノ真珠琥珀瑪瑙ヲ綴ル

巻首繡像倶
平安六栁巻　玉堂汎香寫

繪本豐臣勲功記九編巻之壹

目録

秀吉公自發二種藤一渡二土州一

附　基次高察

谷忠兵衛夜攻却校奪城

附　大濱合戰

長曽我部信親大戦牢城
附山内落没
内府使片桐市正説信親
附信親帰脂

繪本豊臣勲功記九編巻之壹

櫻澤堂山　删補

秀吉公自発艟艨赴土州　属　基次高察

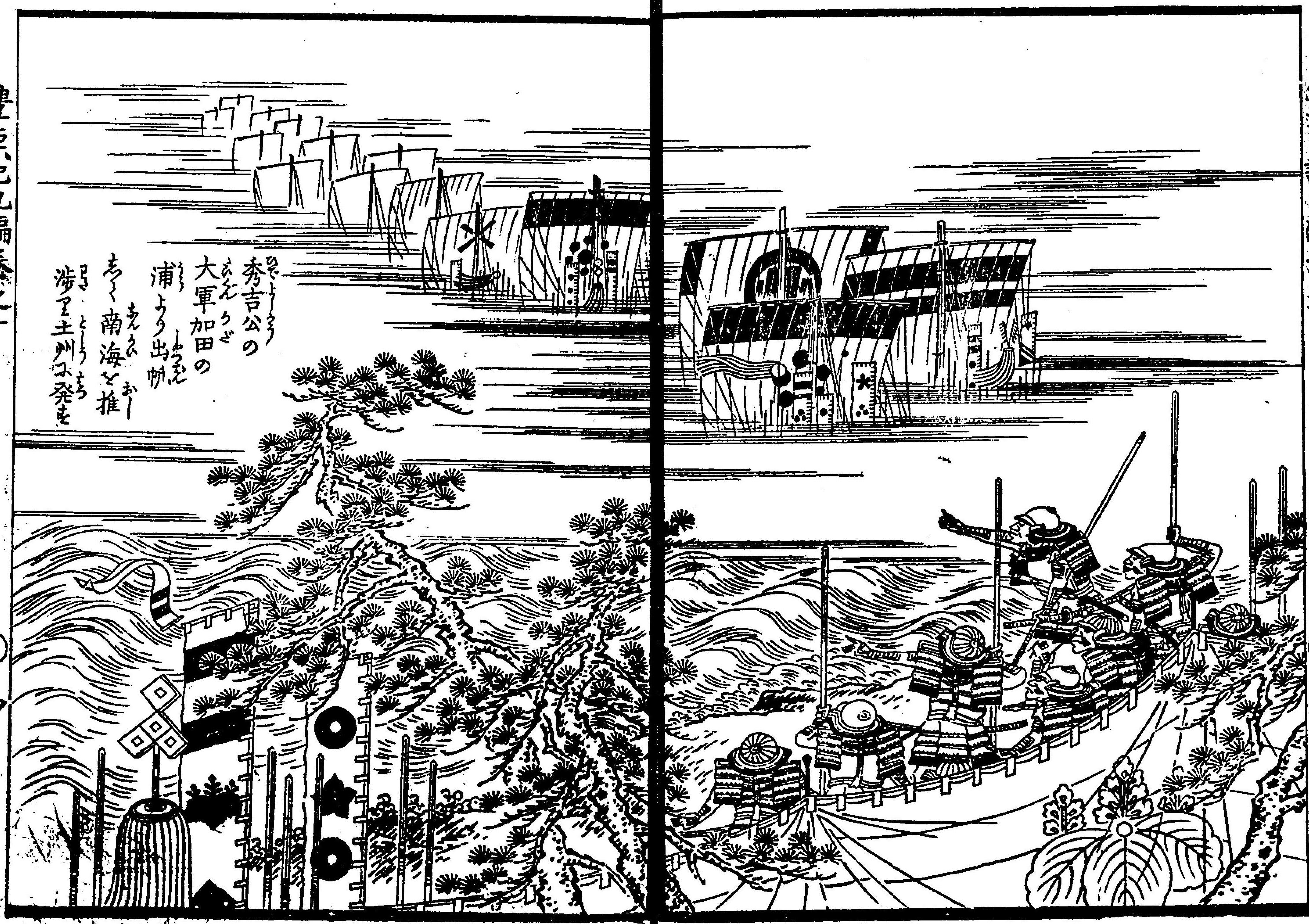
萩を折ことなきと如何。匪斧克せず。然ば加藤主計頭清正た。怪しくも背路より。焼山の城に襲投。苦もなく一防の疑所を攻抜。金子と乱舞の中に撃提。積別熊谷と一臂に付せしへ。現に双びなき切なり。這図と従さず土佐の国へ攻抜べしと。険岩泚谷の苦楚と厭なく。漸く土州に近きくるが。茲に兎里が波といふ城地あり。一里ばかり此方より。その要崖と望みるに焼山賊にも劣らざる。絶壁断行の峻嶮なれば。這一城にうちづらふて。万卒の力と

労せんより。別道より紀向なんにハと。被率をえらんで
細作に出させ。いづれの途が便宜やよからんと。その消
息を待たるゝを見え。暫く軍ハ止りたり。這胸に當りて総大
将。羽柴内大臣秀吉公ハ。泉州堺に出陣ましく。四國の
驍将と試合せ玉ふ。浩ある所に諸方の注伸日々勝利を報
きたる。中に就ても豫州の方なる。加茂小早川が陣より
ハ。細馬舞舟花宮の如く。昨日ハ松山今日ハ焼山。次第志
ざひに攻陥して。伊豫一國を速くも平治し。翌日ハ土州
に乱入をべふ。氣色施て注伸も。内府にべらゝ四國の絵
圖を採出し。進退遠近得失等志むく地理を考察しさ
まひ。然ハ今より紀州に趣き南海上を推渉しぶち…

に土州へ乱入して。元親が偏執を挫がん。其軍役にとて
急ぎ同日。加田の浦浜に軍艦数千を作らせ安たるが。速時
に艤舟をさしめよと。九鬼大隅守と舟奉行として。尚天ハ
天正十三年乙酉七月廿三日。堺の津を進発したまふ。供
奉しまゐらせ個々にハ。福島左衛門太夫正則。片桐東市
正且元。加藤左馬介嘉明。脇坂中務太輔康治。平野遠江守
長泰。糟谷内膳正武則。堀尾帯刀先生吉晴。生駒甚左衛門
親正。筒井伊賀守定次。長岳与一郎忠興。池田三左衛門輝
政。高山右近長房。赤松弥三郎則村。神子田半左衛門通清。
中村式部少輔一氏。德ゐ軍奉行にハ。大谷刑部少輔吉隆。
前田徳善院法印玄以。長束大蔵少輔正家。此等の軍勢十

三万余艘。おの〱纜解すて〱。堺の湊より乗るもあり。日の岬より出るもあり。内府は紀州の加田浦より。数千艘に帆張らせ。南海上へ乗出を然るに船艦九鬼大隅守義隆は。最も船軍に熟練したれば。金銀赤白の采幣掉採波間に指揮を傳ふること。さながら陸地を行がごとく。殊に當日は波涛おだやかなるに。一艘半帽もつゝがなく。秀吉公御方の勢は。土州大湊南湊より發したまひ。ま一方は堀尾吉晴を大将として。這隊の兵船三百余艘。甲の浦に着と等しく郷邑村里を放火なし。小堡枝寨のゑらくなく紛々として攻逼る。四國勢は浩りたる。火急の進兵あるおとの意懐ざる変ありたれば。這敵天より降れる

る歟。且は地よりや沸る歟と。驚傾せる事おびたゞしさならず。馬に鞍安暇さへおかで。大将元親が出張したる。白地の城へ注伸を元親聴て大に驚き。命あつぞの緒冠着面が。南海を推渉して一身總て従なるものゝ。今東方に守兵敷し。倚柱石とたのむ屋き鶴丸君を棄もなば一大事の災禍なりと。秋盛九兵衛を呼出し。汝ぞ秘の要小乗下て密に一の穴へ馳向ひ。信親に代りて彼所を守れ。その方術とは斬々せよと言嘱めて巻しより。秋盛直地に馬を跳らせて。一の穴なる信親が陣に到り。折節と出して元親が言を傳説なしたるに。信親大に驚患なし。然らば汝吾に代りて。這陣營を守るべし。我本國に馳返



秀吉公の大軍加田の浦より出帆して南海を推渉て土州に発を

て。速地に秀吉を戯にせべしと。まづ城中へ此事を伴に稟送り。後の事共子細に命じて。信親まづろの名士と從え。白地に行て又元親に對面なし。軍議と譲じ這隊の勢と。一子又百有餘人率從え。土州大濱當て退返せ。猪又一の宍の城外には。黒田を叙め這方の諸將。軍議目く扱くにして。迦に城を論きべき。方役と工夫なしたるが。其が中にも後藤又兵衞基次は。射様に登り曉るより。暮る頃まで目も離さず。敵の蟯蹊と双方（城中の信親が陣城外）等しく窺在たるが。今日後逼の信親が。陣中の相と觀察るに。事昨日に変じさもべ。まさしく意に疑しく思ひ。工夫を凝して在ける所に。瓜生之助傳座より。基次が袂を牽足下

斯まで何とろ視玉ふ。敵陣に変ありやと。汎に又兵衞うち頷き。足下も快と信親が。陣の虚實と窺觀セよ昨日までは十分に。陽氣冲て天と衝しが。今日太陰靜まり。去るともつて外陣と城内とと窺比ぶるに。城内の氣は泌で強く。城外の氣は浮で弱し。將て兵卒心乱きて一致セざるは。正に是信親こゝに在まるべしといふに。茂はいよいよ憤り。甚は又いろある賢慮にや然ひ名いまだその穀は聴きといへども。日数とも推を料は。秀吉公南海より。土州へ乱入し玉ふ頃ありけるが。さめに敵將元親さきと衞防の大將なるまば信親をもて本國へ呼返し。此陣中には代將と容。信親の旗はそのまゝにして。進兵

とあざむく計策ならん。敵將なりとも信親ハ。最もおそるゝ名士より。其將陣に在ざれバ。諸士の意も換るゝものなり。這故をもて外陣の。敵の氣よハくなんぬべしと。說きて董へ感嘆なし。實に〱神慮俺們が及ぶまじき所なり。然ある時ハ進退いかん。然ばこそ主人とおそゝめて。まづ外陣を乗捉べしとて。後藤基と一緒に。黒田孝高の前に出。信親退去せし事と。つぶさに演說しけるにぞ。孝高大に歡躍み。さらバ速時に准備せよとて。黒田の勇士三千餘人喊を作て推進けり。是を見るより蜂須賀家政。仙石。一柳等さかひに懸でもおくれじと。総勢一途に攻進みけるが。後藤が詞むなしからず。信親の陣一時

に敗れて。右備左備に散亂し。秋森九兵衛踏とまれども。その功さらにあらざれバ。慚念ながら引退く。黒田の勇士最励しく。追逼て攻寄りける由え。秋森武勇ありといへども。半途に留得る事あたハず。白地の城へ退きける。進手の総勢そのまゝに。名士と激して驀然と。一の寨の城へ推進四方より推取圍ミ。攻立ること烈火の如く。然ども要害險窄にして。守將ハ名にあふ谷。江村鉄炮矢を惜まず防戦しけれバ。進手ハ徒に損するのミ。右左に當日も晡天となりけれバ。軍を收めて寨を補葺其夜列將會集して。軍の評議に及ぶ折から。五十嵐内匠來着せり。其も今五十嵐が來りし所謂ハ。加藤清正事を議らひ。一の

宮の敵将として。降らしめんがためになん。内匠は直地
に秀長卿の陣に入来し。侍士を得て清正が。折翰を披露
に及ぞをとり。秀長々属地に内匠と召容らを對面あつ
て言せらるゆゑ。其方ろ己し日清正に降り恥を忍んで
元親の命を助ん忠信は頼て。主計頭が告にして承引ぬ。
験に侍もしき勇士なり。其方が忠志にめでゝ。長男我部
が家は絶さらしむべし。且又這般内府土州へ。御進発あ
りと聆清正に願ふて君方に来り。一の宮の城将を説喩
さんとのこゝろざし。いよ〳〵賢き料理なり清正も公
よく許して。内匠と這方へ遣せしは。渠一個の功とおも
なく。いさゝかしともて俺們に譲るは。大張といひつべし。

這等の旨とよく意得城中に到りなば。平天下とある一に
して。谷江村と説きよとて。五十蔵と城中へ遣しけり。時に
に城将谷忠兵衛は。五十蔵が来ると聆て。勃然として憤
怒を発し。向き内匠が動挙ぞなき。不忠不義の仕足らぞし
て。茲に来るはなに面目ぞ。一言の下に誅殺して。不忠の
罪を糺すべしと。怒気鬢髪にあふれきて。歯を切しまつ
とおろへ。五十蔵は諾々と。忠兵衛が前に来ると居より。
瞰と眺で声をおゝらげ。面は人に似たりといへども。心
は虎狼に劣る不義臣。阿容々々とよく生面さげ。わろ
なる言を云なんとて君面前へ来りしぞ。個々内匠に棄
羅て主君の許へ遂らきよと。敦囲く指揮なるを。五十蔵

ハ些とも動ぜず。足下が怒も理なれども。吾言ところも
一応ハ聆て其理に稱はざれバ。牛裂にせらるゝとも。心中
苦て怨なし。吾事彼も活捉らる。唯死を望めど清正許さ
ず。天下の至理と不理とを説て。其方羽柴家に自荷擔せ
バ。元親いかなる事ありとも。本領安堵うさぐふべかる
ず。其方一個の心に因て。主君の存亡分明なりと。理解の
節々乃理に嘔へり。最も遠邪に及ざるされ。石田三成
使者よりし時。足下と吾と主君を諫め。和平の約を勧め
しかども。主君聴容なかりしゆえ。君の心の随に任せて。
合戦にハ及ざり。然あるとのありしとて。降参せし
とかハありさまども。國家の存亡を案徹ゆるゆえ。此に

來りて足下と評議し。主君を勧めて秀吉に。和を求めん
と思ふなり。今ハ既隋言を弄。家長久の計策を繞らさる
べく然るべし。此事調成うへにして。吾首を刎られよ。然
されバ乃士恨もなく。愉快死を遂べしと。涙を流して述
らるれども。忠義清心に疑惑を懐き。汝いかなど弁を振
ふて欺かんとすとも。いかでか吾を欺得べき。二の句を
聆に及ずして。速地に内匠と郷て。人質曲輪へ出しを籠
ハ。盍忠義清正士に留ふていふやう。五十歳城中に在うち
ハ。敵将宮で心を容し。陣の備も怠るべからず。今宵敵
撃し敵兵を追散し。主君御父子に力を勠せん。快准彼せ
よ兵卒とて江村にハ城を守らセ。精兵勝て五百餘人撃

出ぢ。時刻ハ子の上刻と。沫唾を呑で待在より

谷忠兵衛夜毆却被奪城 属 大濱合戦

義過て疑を聊く。智ある者ハ癡を生ず。谷忠兵衛が義気ある
て。却て其身を過ることそ。是亦内府の武徳ぞ帰する所ぞろ
し。然れども上方の諸大将ハ。五十餘日内匝と城中へ迫へ
し。其後にして評議ある。時に大将秀長の言く。今宵五十
餘ゲ理解によりて。城将降伏すべきもの。欲洞すれバ四
國の平均遠きにありといへども。多くハ成熊し
がさうらんと。聆て孝高膝を進ませ。陳ふく合理に當
もり。城将谷忠兵衛ハ勇気烈火の如にして。五十餘ゲ理
に伏すなし。然すれバ今宵ハ大将の堤ありらあらんぞ夜

撃の投るあるあらん。各准備しまふべし。其方術をバ斬
新し。鎌合せ々るれども。諸将現にもと同意なして。自己
くくが陣營に退て。密に後隊を設けより。斬とも知らぞ
谷忠兵衛。時猶未中をあるころ。射樓に登り敵陣の。稍を
熟く視て行るに。諸方の篝燎次第に暗く陣く愈ゝ気がち
ありらすべ。其えや時こそ至りれ。声を呑で推出すべし
と。速漏の声の沈くと。子の刻を打出を。聆と共に谷忠兵
衛。乃百餘人の精兵を率し。城門開かせ推出し。山を下り
て坂際に。隊伍を設かし。鋒鏑揃ぞ。正中央の大隊へ喊
を作りて殺投を。鋒須鉾の勇士強卒。領て将令と為り
たるもえ。慌忙く然を為せ。八方十面へ散乱を忠兵衛お

なひに総起。苦もなく一陣を蹴破り続て黄坐が隊伍に
突掛縦横無方と逐崩し。黒田が陣所堀一柳が隊伍まで
力も労せず捲廻る。程も進んで行先へ是秀長が本陣なり。
先努めよと激声一喝咄と喚て突掛しけるが斯へいぶ
ろしや陣中に敵一人もあらざりけれバ。忠兵衛あまりへ
とうち驚き。退返さんとせる足底に鳥銃一声響くとひ
としく。あれと喚ずとなしくりけん。四方一度に轟と伍
て。仙石田中小西が軍勢遠近に鳥銃撃連怒潮の如く
起り立。忠兵衛おなひに驚顛なし。扨ハ敵将はやくも察
て。これを羅るの罠を設けつるものか。噫残憾やと取て
返し。一方を吹靡り。城中へ退入らんとせ帰路を塞ひで

黒田の勇士後藤。栗山。母里。黄兵と提断谷が名士と一足
も通させず。西に奔れバ蜂須賀家東に避れバ堀尾堂城
へ向てハ半兵衛も容させまじと防ぐといへども。忠兵衛
あらぞと死憤と究め。突などに撃などに。幸くも一條の
活路を突き。城へ逃着てあらと閉よと呼えれバ。江
村備後守濱まと堞の上に露出。谷忠兵衛さしろに瞼。汝へ
君にも悪きにも。従将に渾交せるなとなく。我意を振ふ
て餘人を落し。主君の危急に心も着かぞ。卻て汝が忠義
立へ。主家を亡さを端なれバ。俺們汝の出るを待て。主君の
さめに降来なし。元親父子の御命を助けんかと料理
より。先非を悔む意あらバ。汝も羽柴家に降るべしと。大

音声に喚はゝりけり。谷忠兵衛莿果城を眠若立ゆるとき
るへ。上方勢追遍来り。激然として突て蒐る。谷が八百の
勇兵軍氣猛しける機会なれバ。戦ふことさへ途惑ふて。残
女なふ敵をより。忠兵衛死期とこゝろ究て。唯一騎敵地
と脱出。白地を當て敗走を。蜂須賀勢追をましじと。白地近
く退ける所に。先達て一の兵を敗走しける。秋長九兵衛
城外に結陣しけるが。斯と見るより頻に指揮なし。谷を
敵をな救へとて。自勢を率て撃て出。蜂須賀勢を追返け。
忠兵衛と伴ふて当陣中へ請じ。容戦労を慰めて後。秋長
谷とうち伴て白地の城に投じより。元親ましゝの敗軍
な。漸く意猛をれるにや。今ハ白地の牢城も。快からざる

事ありと讃岐の防軍細川源左衛門とも喚返らせ。土佐
一國へ自軍を纏結。秀吉を撃捉んと。急使をもつて細川
と。白地まで退取らせ。這地も大将の要害なれバ。大西主
計頭。大多坂捨頭。姫倉徒次兵衛の。三将をもつて這城を
守らせ一万余の勢を残し。元親その身ハ細川倚の諸
将を随ゑ。土別を當て引退く。斯て在一の宗にハ。江村備
後守城を宛て。秀長秀次両々を迎へまゐらせ。又十露一
斉言を共にし。主人元親父子の身を縛くもさのところ
にぞ。最も神妙の事ありとて。彼の輩に皆鞍安。吉光の太
刀に黄金百両吉光と江村に贈へより。中にも又十露内
近が切ハ。群に抜して廣太ありと。鍔元の馬に長光の太

刀黄金百両を賜りけれバ。内匠ハ泪を潜々と流し。吁井
心や臣の身として。君を斬り主人の安危の知れざる先
に。御褒賞に関るもと太だ愧る所なり。乃士降参つかま
つるもと単に主君を懐ふのミ。然あれバとて賜物を辞
ミもふまハ無礼なれども。這義ハ単に御免あれと詞を
決して承ざれハ。両卿を始め諸将勇士も。感涙に膝を漂
へせけり。然らバ四国平均の后。褒美を心に任すべし。這
上ハ伊予に辞返り。一の宮落城の趣を。清正に告られよ
と。折簡を記書揲されけれバ。五十嵐内匠損拝。別辞をふ
して豫州へ返りぬ是より又々黒田蜂須賀を召集ら
れ。軍の評議ありける所に。まづ白地を攻陥て后。土州に
乱入をべしとて。黒田をもつて先陣となし。白地の城へ
推進より。其も這城地ハ高山にして。巌石峨々として天
を掠め。怪樹鬱々と雲霧に鎖で。殊に堅牢の城郭なれバ。
元親もまで本城の如く。安然として牢居しけり。され
ば固て数百万騎勇を振ふて攻るとも。容易陥べき相も
見えず。将て姫倉大黒なんど。術を尽して防ぎけるゆゑ。
了得の黒田も攻倦ミ。城を睨で磬ゆる所へ。讃岐に向し
浮田黨も。細川源左衛門つと撃破て。同じく白地に馳集り。
瀬原といふ所に陣す。然バ阿波伊予讃岐の中へ。法城残
らず攻陥して。土佐堺なる白地の城のミ。独立せるの今
となり。土州もつとも危急なれども。元親ハなを嶮岨と

さのんで。更に歴する気色なし。其も土州の國欲と謂ハ。横竪々なれども縦長きこと百里と伊豫及阿州ハ隣境なれど。讃州よりハ二十餘山の嶮岨あり。又阿波路より入らんにハ。二條の外通ずる途なし。伊豫ハ土州に僻る國なれど。通路あまたあるとも防禦もつとも厳密なれバ。了得ハ智勇の清正隆景。国境にして進得ず。吉川も元久武が。退る跡の一陣と。棄ふるのミ切ざる術なく。彼方の軍と試合在より。治る所へ五十嵐内匠。秀長卿の御帖を捉へ。加藤が陣に返り来て。一の家の始終と備ハ譚り聞えるにも。五十嵐が挙動と。或ハ歓びあるひハ感じ。暫てハ這地に猶豫しぐさし。内府の後遍延引せバ。

山谷の経所にて。苦戦しつりんも升ぐさし。先や此地にハ守兵を止め。新濱口より土佐へ赴投君の部助と傚しまのうせんと。淡京にも議交して。両勢二万三千余騎移ん濱齒て奮発せり。茲に長曽我部掃部頭ハ。先日阿及大麻山の合戦に敗と被り。山内の城に入て。係農に数日と送しけるが。漸く療も愈ける所に。内府南海を推渉りて。土州へ乱入せると聆取ものも取あへず。自勢一千余人と率し。大濱の本城に赴返り。城代仮名式部輔。石谷帯刀と事を議し。鶴丸と山の内の城へ移し。其身ハ三濱治部右衛門。壁中喜八を率従え。一万余騎の軍勢にて。南瀧へ赴向ふ。然れども内大臣秀吉公ハ。其勢十三万有余人南瀧

より上陸し玉ひ。大濱の押畑將監へ推出し足場宜から
ぬ所へ焼起。山に傍谷に臨み。隊列便利に陣所を設け。然
して福留正則に先陣を令属らる。大濱の城へ向はせさ
せ。二番は加藤左馬助。三番は片桐市正。四番は脇坂中務。
次第を以て推進る。先進福留正則は五千余人を率陸え。
南の坂より登る所に長曾我部掃部頭は[illegible]を作りて馳迎
く。福留大に喜悦み。ミづから正面に進出。破竹の如き大
音声にて。四國に鼓攣嫁嬢の輩耳傾けて諦聴。内大臣秀
吉公の自内におひて。鬼神と号せらる。福留左衛門太
夫正則なるぞ。看さるゝは今日が始てなるらん。去来や力の
程を試せんと。長戟操て雷電の如く揮廻し。掃部頭が陣

中へ。旋風と成り掛て投れば。吁大將にあるなとて。桂
市名清吉村吉左衛門。大橋茂十郎犬崎玄蕃。可児才藏吉
田吉九郎紀川九郎造などいふ猛士ら。是先登んと斬て
蒐る。掃部頭大に怒り。勝くも誇る正則かな。其首拔て衒
殊を見せんと。是も正斜に進んずり。左衛門太夫まをとま
せ氣燥唯一搦にと突かゝると。掃部も名高き猛將なれ
ば。あはとばかり途と挑合て勝敗さらに分得ざ浩るところ
へ二番隊。加藤左馬助嘉明。三千餘騎を斜めに操出し。
横陸より突て蒐る。左右を助る勇士には。藪内三右衛門。
川村権右衛門。まさ三番隊の片桐。脇坂両將六千余騎と
もて。後を断んと馳蒐る。されば流石の土佐方へ。一万余

人ありといへども。大に乱れて右往左往し。倭僧に崩蒐
るを掃部頭は鱗断となし。四尺二寸の太刀揮繞し。千面万
角當るをよしと。自方を懸まし砕若接死。此地を逃ひて
何国へゆくぞ。逃るとも外に道なし。死ば潔ふ戦死せよ
と。呼はり〳〵砍て廻れば。三浦治部右衛門。堅中喜八郎
大将を撃をまじと。翼となつて補戦なし。端なく福島に
対應し。三浦堅中のぞむところと。路をならべて掛て蒐
ると。吉村吉右衛門。可児才蔵馬前に遮えて三浦堅中に
楪合。掃部頭は驀地に。再び正則に斬蒐激水烈火の猛威
を敵し。小嬰時がなどは戦ひたれども。掃部ようやく疲
れたるにや。遂に太刀を撃落され。身を沈ませて槍尖潜

り馬操侍て秘びと掃む。正則も意得たりと近に渾身の
奮力を。欲と纏とに張逼れば。両馬の八蹄振得ず。猿臂く
じけて倒るゝを。福島さらさず掃部の頭を力に信せて
牽落さんずる。挫と落れば正則は。昔もなく上に踏跨り。掃
部頭を捉て壓得活捉にして従士に令じ。内府の御陣へ
縄登し。再び馬に打跨り。長曽我部掃部頭を。福島正則活
捉たり。残る兵士は降参せよ。然されば栄死身を安らか
しめん。いろいろと呼はるを聴て。三浦堅中の両人力
挽みて吉村桂に撃れたり。土佐勢まさく狼狽逃る
もあり降るもあり。一万余騎ときこえしも。進兵を遮ふ
る者はなくて。食煩ゝに散失たり。程進まんとなしたる

土佐の国大濱根元城の要崖危路を往来する

ぐ。日色西天に沈ミけるゆえ。軍を收退法卒を労ひ。暁なば大濱へ推進んと。夜を守ること厳なりね。法も土佐方の兵卒は。大將を活捉に撃殺されける疲武者辛ふじて大濱の城に退去き。此上はまや本城へ。敵と引交存亡を。究むべしと期を定し城中におそ對凝守ね

長曾我部信親大濱牢城　属　山内落毀

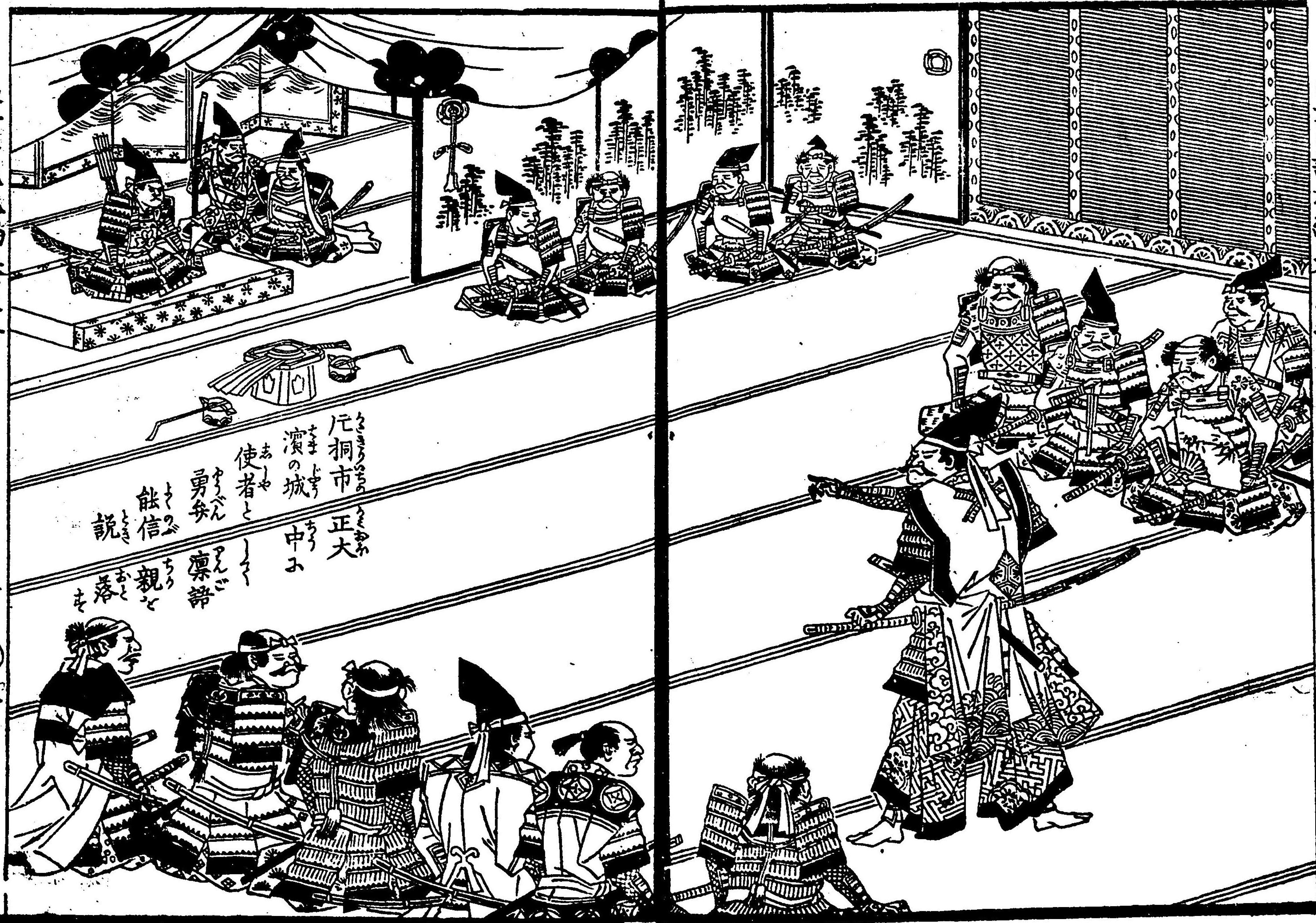
卵に者と鷲との。差別はあれども。覺石に投ぜれは。いづれか固きまとを將んや。开も此大濱の城と謂へ。中に九の曲壁あり。外に七重の石疊を重ね。天守は碧の雲に聳え。壕は滌水湍くとして底を量るにも及ばず。是元親の源城にして国中第一の要渾なれば。數百万騎攻進るとも怖べきにあらじとて。各繞で待とおろえ。信親父の命に困て。阿波一の宮と退去なし。大濱の城に到着しければ。法將まもく散び繞ミ。掃部佾の事を品釋り。出戦のことを勧められるにぞ。信親威儀を掘らひ。実に然もしくも稟しけり。是ぞ秀吉を對敵として。戦もんおとは年來望む所なれども。兹は計議と先として。合戦と後にせぞんば稱ふべからざぞ。斯料理は敵に臆するやうなれども。個々我のミ思なれそ。總て軍を發せんには。まづその位と察微て。然して後に戦ふべし。是ぞ其隊の大將たるもの。務て知らる所なれども。変化に臨ミて乙矢おあし。是其陣の布相と。隊伍の進退虚実まおのて。旗の動静

閑合等熟覧せざる所あるがゆゑ。故を取ると去多し。
亦牢城にも心構を賢ふをべし。斯る山方の要害には。断
崖竪堀潜穴あるひは間道捷路。程堞には射窓の傍相お
り。一二の柵の浮沈を撰み。叢橋小閣大閣鹿柴虎落の結
構且亦囲地の城構は。甲丸乙丸三郭張丸の結船懐射窓。
寒塹土障の小郭托婦長樓高垣麓の閑相邸屋構は三重
に繞らし。又壇の築旅二重構閑塀土堤の築相ありとらは
総て将くの構意所なれども。稍近ざる隈あるとも て。故
と取の態を生ず。その本は是将卒の。心同じく和せざれ
ばなり。大将は仁と志なふして。使卒をあてもまゝ慈しみ。使
卒は義気を賢ふして。岐心なく防戦なさば。百戦ゆゑなく

ぞ百勝を今秀吉の所行と志るるに。よく此道を守るが由
なし。幕下の将卒仁義に感じて。是手の像く進退をなせ
ば。天下に敵ある者もなく。此敵とい目前に引対辱
るの戦ひせば。自方いかほど強しといふとも。百戦のう
ち一度も利なし。各おもふの理を察し。智を先にして勇
を後にせらるべしと。義理明白に述られば。諸士群卒に
いたるまで。膽を倒して感服なし。這君なるべ二なき。今
と弃んも惜からじと。衆同和して籠城せんと。一心まさ
ます策励せり。実に信親は年齢卑き大将なれども。智仁
勇義に缺ることなき。無双の名士と謂つべし。既に土佐へ
信親が。牢城せしことを伝聆。池集る四国勢には。依岳七

京亮南宮九兵衛。石谷兵部。中内源兵衛。光富権之助。菊地左衛門尉。丘岡民部。福富飛彈守。吉田次郎左衛門等の如く業内猶しけれバ。烟経困乏を甚哉しく。こゝに大濱に帰寝り。六万余人の勢を得より。それぞれりゐへ兵糧金銀。千余万粟ま充満し。矢炮土石ハ百年の備あり。薪水もまさ山に溢て。なまくれ乏しき物もなし。信親おごそうに指揮とつさへて。防禦の備に虚隙なく。敵進来らバ微塵にせんと。拳極て待蒐ろう。斯て又内府秀吉公ハ。南濱ま本陣を居玉ひ。進むべき道なしき所ハ。土塊と入て溪河を塞め。山を抜谷を埋め。石を畳ミ橋を渡し。大濱近く隊伍を操倚城の山方に千里境を懸るほと。数十箇或ハ

井楼を高く組揚させに昇りて。城中の相を流視め玉ひ。其余本陣へ諸将を集め。内府令出らせられるやう。意循き長曽我部が挙止りな。這城がまへの堅牢なるおと力をもつて攻るとも容易に陥べき城にあらず。まづ這城ハ閣て。山内宮知甚外甲の浦の海辺より繰蒐にてきびしく攻なバ。卒ハ降参後さべし。然まれバ諸方の途閉けて。三ヶ国の自方の軍勢往来自由なんぬべし。扨て大将元親ハ。大西白地に在りませバ。本国へ帰らざる先に通路を断截るそよろしき。疾く隊旅せらるべしとて。高知。山内の進軍にハ。生駒甚左衛門。長岡与一郎。山内猪右衛門。赤松弥三郎。大谷刑部少輔等三万余騎甲の浦の本道より



豊臣記大編巻之一

ハ。平野遠江守禮谷内膳正将一万余騎にて延向なせ。大
濱の攻隊ハ微の如く。福嶋加藤片桐脇坂なをに筒井素
山。神子田軍監にハ前田徳善院玄以をかえ。甚勢凡万有
余人隊伍を列ねて推進させ。信又内府ハ本陣と。北畠に
うつしたまひ二三里ばかりが其際に陣厳くと彌漫
くとして着る者と。おどろかさぬといふものなし。且又
兵粮運漕の船ハ。百色の帆を忽連ね。南海風波の潮進退
を登合せ。推渡るもと牽も断らぬ。其の送迎に従ふて陸
地を轄る糧車ハ轆々として道路に絶ぬ。関々堠々峙く
刻々の烽燧ハ。おのく虚実の暗号に違えぬ。其れらの
彼我の密なること言語をもつて演がたし。茲に亦長曽

我部宮内少輔元親ハ。居城の防禦を堅固に命じ本國指
して遅返を途中遂く注伸あつて。土州の札坊おかれ
なりねハ。心中甚太慌忙き山の内へハ投去て直地に
高知の城に来り。比江左衛門。野中三郎左衛門等に
對面せしも軍の評議ありけるが。是非に大濱へ出張し
て。信親を助くべきゝと決せられしに際もなく注馬の
注伸飛雲の如く秀吉数万の勢を率て此地へ向ふもと
急あり。御准備あつて然るべしと。告ぐるに程もなく生
駒。長岡赤松大谷大軍一地に城下際近く推進さり。大将
元親大に驚き忙しく指揮を傳へ防禦の方策とさせ。大
息次で叉手ゝて無念の至りなり。当城もろ這般なをば

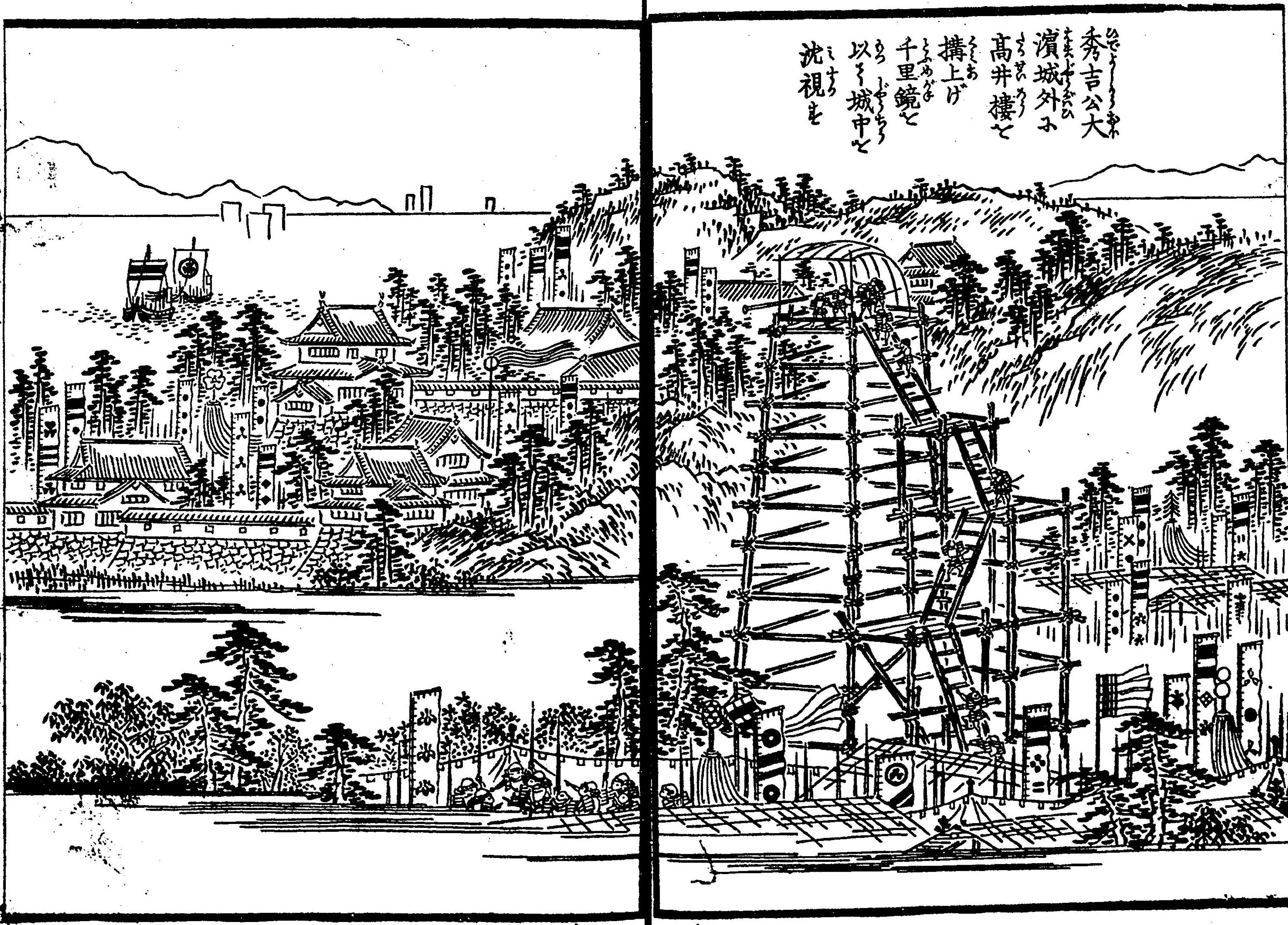
大濱の城へいろにやおり。息男が身に事あれば。此世に
あつて楽なし。先や打出寄手の軍勢を追ちらし。息子を
救はずんばあるべからず。個く続けと狂氣の如く突立
起るを。姫倉堅中倍要踊してに強止なし。意をなぐさめ
けるにより。元親まづらに瞋恚を猛わ。防禦の手術をある
にせり胸に生ふ甚だ来つ。長宗与一弟。山内猪右衛門
松弥三郎・大谷刑部少輔倚蘭知の城の三方より単發急
に攻起る。まつさき聖遠江守。猪谷内膳正倚ハ甲の浦の
下道に寛り。捜寨ことを攻起けるに。上道より稲尾帯刀
楼に採で攻落より。おもぶさめに。四國勢兵粮のみちを
断絶られ。今ハ一日も保ちがたく。打連こゝ降参しけれ

ば。弾丸干戈に鑑らずして。土州の東北通路ひらけ。阿波の
伊豫讃岐の諸将より。内府の本陣へ使節を遣御出馬の
義を祝しまゐらせ。然れども加藤主計頭清正へ。新濱口
を攻破り。難なく土州へ乱入しければ。國中の騒動おほ
かたならず。宛鼎の沸が如し。這時に當て細川源左衛門。
秋国九右衛門。久保後河守谷忠兵衛將迹ひに使者を馳走
らせて這相にては自方の兵卒日々にやゝに落失て。殊に
兵糧の途絶より。速くも秀吉大軍を率ひ。本國に攻入る
れば。その危きまつと眉下の卵より。俺們徒に此所を守り
在とも耶益なし。速地に諸方の自方を合せ。敵に通路を
棄をれざるうち。本國土州へ退くべしとて。各自勢を率

防え。なほまで持有し城堡をもて。這途那波にて一斉に
あり。山の内當て進むところに。生駒長宗の一万余騎。八
方より発起城中へ投立ましと。縦横百列に攻起る。細川
秋袁谷済の勇卒死を変して戦ひける。城中こゝとそ
るよりも門を開ひて撃て出自方を助ける幸入んとせ。
長岡忠興なほを着て敵を通せと指揮しけれバ。生駒勢
も其意を悟り。おの〱中を死ひより四國勢ハ倖備な
りとて。前後を提して城にいる。長宗与一郎生駒甚左衛
門。自勢を率倶し彼卒に紛れ。苦もなく城中に乱投せ。然れ
ども四國の諸軍勢ハ。唯主人とのミ看守りて。入城にの
ミ心奪はれ騒斗あるに意も属らず。城門を開閉と閉さ

り。諸将迎ゐ再令を視し先や寄手を防がんと。其隊伍と
なさんとせる時。爆〻烈〻たる響あつて。這隅彼隅の陣
屋〻〻一時に焔火燃熾り。秋風に誘て燦爛しけれバ。城
兵備周章回るを得たりと長宗生駒の両将速くも面門
を撃破り。赤松大谷を引容〻。手頭万尾の分もなさぞ。
無二無三に難続る了将の細川谷。秋袁此城中にも堪り
かね。再び寄手を突破り。山の内の城を棄て辛くも高知
の城に逃入君臣死中の生をよろこび。籠鳥となりつゝ
なおるといへども。釜魚俎羊のおもひなし。歌〻として
死を待のミなり

内府使丹羽市正兼信親属　信親帰服


秀吉公大濱城外に高井樓を構上げ千里鏡を以て城中を沈視を

己を頼で己に亡び。才に溺流で才に破らるゝの倫輩こそ英雄にして真の英雄と称べかるぞや。然バ長宗我部元親ハ。高智の城に対塁守。弥三郎信親ハ。大濱に牢城をといへども。外に帮助る自軍なし。則ち両城の中途を断れて事を通ずる便宜も得ざれバ。網罟に樊籠せらる。魚鳥にも猶劣れる身のいかんがせべき術もなきぞ。将卒皆に惘然より浩りたる所に阿讃を進める上方勢。秀長秀次両卿を将め。加藤石川。小早川黒田蜂須賀浮田。仙石小西。一柳等十二万五千余騎万方の通路を得て。おもひ〳〵に土州の地へ乱入すると崩堤の溢水を塞得ざるが如く。山林谷堅す地として上方勢の旗幟標

の。翻らざる所もなし。今ハいかなる猛勇博智の長宗我部も。足手を動かすこと能ふまじ。先や元親の居城なる高知の城より攻落さんと隊々伍々と操出して。日夜を分たず攻させより。胸に大濱の大将信親ハ射撲に望りて敵の隠謀と察覧に。天積中秋の初なれバ。進軍我と止てより。十四五日を経るもとなれバ。漸く怠る色あるハ見。馬牧牧畔などの兵卒ハ。盗に酒肉をたしなむあり。暮足寒ぐて睡もありて夜ハ懐むる者ぐちあり。信親とくともの相を宿て時分ハ来りぬ去来やそ宵ハ夜うちをかけて敵をの目と覚させんと。三千余人を五隊にわかち。猛将が陣へ推進よりされども軍になきたる正刻。

ちつとも驚く気色なく。寄手の敵を固くささへて。されど防ぐといふといへども。信親にあふさがふ勇士には。馬場五郎次郎。大多坂圖右衛門。福留隼人同飛弾守南岡九兵衛。石谷兵部少輔。進退實虚に秘を盡し。口又受持居たるなれども。小身の福富正制も。あしらひかねて彼是しけると。二陣の加藤左馬助。三陣服坂中務左右一齊に推いづし。福留勢を部助んとする。信親いまは是までなりと。輕くも自方の勢を纏めて。城中へ退収せり。されども八月十一日の夜のことなりし信親主従三千余人。あんなく城に退入て。いまは敵の強弱もあきらかに察知せり。そのうへ是れ高知の通路を斬ひらき。父と存亡を共にせんと。軍

機工丈を凝せる所に。父元親にきこさかへる。田中九蔵と呼忍の者。月午の南天に大濱なる。面門の外に走せ来り。しのび使なるよしと。端く敵じより番人これを大将に傳にて。関をひらき呼入つる。信親のまへに伴ふより。九蔵又体の汗推拭ひ。高知の一城そのはじめは。長岡生駒の敵口又子後に張兒の挑合と。てがろく防禦せしところへ。豫別の通路開きけるゆゑ。加藤小早川もやくも迚投。背路より攻登り。棧起ること吐炮の像し。それさへあるに吉川元長黒田峰須賀乱隊に。棧居く攻遍らせ拒桃に衛なく外廓を乗取らせ。乙の丸に寄せきより。今は大将元親公濟生害の外他すなしと。脾息縫で注仲を油

座の人々なれを驗て。轉に呆て一句も出ず。顔見合せて啁然より。信雄忽地憤怒を發し。此上ハなにおゐて默止さん。城中迄の兵を率連。高知にいかりて父左馬助ん。陣徇せよとぞ命じける。此時内府秀吉公ハ。大濱高知の叔城を最嚴に捉らしむ。猶て高知の元親ハ。外郭を既に棄てゝ。乙の丸も猶破れんとしつ。危急存亡一塲の外と出べからず。這回に乗じて隊強く攻なバ。元親を抛げんなと容易けれども。長島我部家ハ天下に切ある舊家なればバ。なれを絶さんなと本意にあらず。劉ヤ五十路德居倚が。義信の者ども棄がされバ。落る逼迫の軍におよび。更に合戰を止めさせ。片桐市正を御前に召され。今長島我部が進退存亡斯期に逼りて途を失へり。汝大濱の城中に到り。まづ信親を說破せしめよ。渠よく歸服せるものならバ。其餘の諸將ハ同意せんなと疑ひなし。信雄をもて高知へ行しめ。又を歸服なさしめなバ。難かるべきなとならるべしと。仔細に計義を命听らる。且元膜鉢まわりけるとて。陣屋に返て躰繼く准備し。大濱の城へ赴きける。片桐その日の打扮にハ。南蠻練の緞索の固衣白銀汚穿の袋具にて。矢筈をおとる胜甲に。白地の錦の汗衫製の弘緒を被。十王吹の肱甲臑楯赤地錦の戦外套黄金作の太刀を佩。連錢あしげの馬にまたがり。五十余人の從士を從へ。運々迫々と列歩なさしめ。城門近く進々

来り。声高らかに呼ふて曰く。これハ内府秀吉公の家臣片桐市正且元使命を蒙て進趨せり。大将信親に伝説あり。速地に城中へ通されよと。顔容をバ衛卒们次取に斯と伝へけるにぞ。信親這回出軍せんと。準備に及ばれける機会なるが。此詞を聴てしばし沈吟し。諸将に向ふて。秀吉今更片桐をもて。這城中へ使をおこと。甚以て不審し。善悪ハ左も右もまづ呼入て意趣を聴然して後に事と成さんと。案内なして片桐を。甲丸の廳に通しけり。此ハ評定所となへて千丈一面障戸なく上座にまふけし将床あり。是に座しける大将ハ。是弥三郎信親なりけん面色白く眼光澄で。威風自然と猛かりけるが。市正を近く

招き座を縦て来意を問ふ。片桐些も威儀を損さず。肩臂を張て声高く。乃士主君の命を蒙り。此に来るハ長曽我部家の。存亡を説らんのミ。他事なし。今我演る所を聴て。其理の所存を枢ひなバ。否や應やと聴へきめよ。強て斯ふとハ稟さじと。謂セも果ず弥三郎。噫市正ヱ言なるぞ。吾家の存亡におひて。何ぞ秀吉の指揮を承べき。不礼至極の稟條発言の理非に因て。汝が首を刎べきなりと。眼をいからし罵りバ。且元騒然とうち笑ひ。斯ハ信親に似気なき命セ。此敵中へ使者たる者が。命を惜んで来らるべきか。我説ところの是非とも聴かぜ。怒発するハ思慮短ふぞ覚ゆなる。此に長曽我部の存亡と謂ハ。是まで智勇

を四國に播し。遂には一天下を斬靡けて。扶桑に武名を輝せんと懐さるゝ偉。是当家なりしにあるぞ。今戦國の習なれば。各偕にその意あり。然りといへども甚理と。不理と。且大将の行状とを心の根原となさゞれば。眞の良将とは謂がたし。是其首将の知る所にして。まさに行ふ者すくなし。然るに此國の法将においては。他をもしらず自をもしらず。且その天下の是非をも弁ぜず。我意放逸にして自己を矯ぶり。這所に迫んで糺逐を取り。家を亡し身を滅し。切多き名を消せと。武士の面目と懐さるゝ歟。殊に愚将の行と言つべし。其縁故如何と推て謂ば。内府紀列に出馬の據舎後路を断べき計機も做さば。上

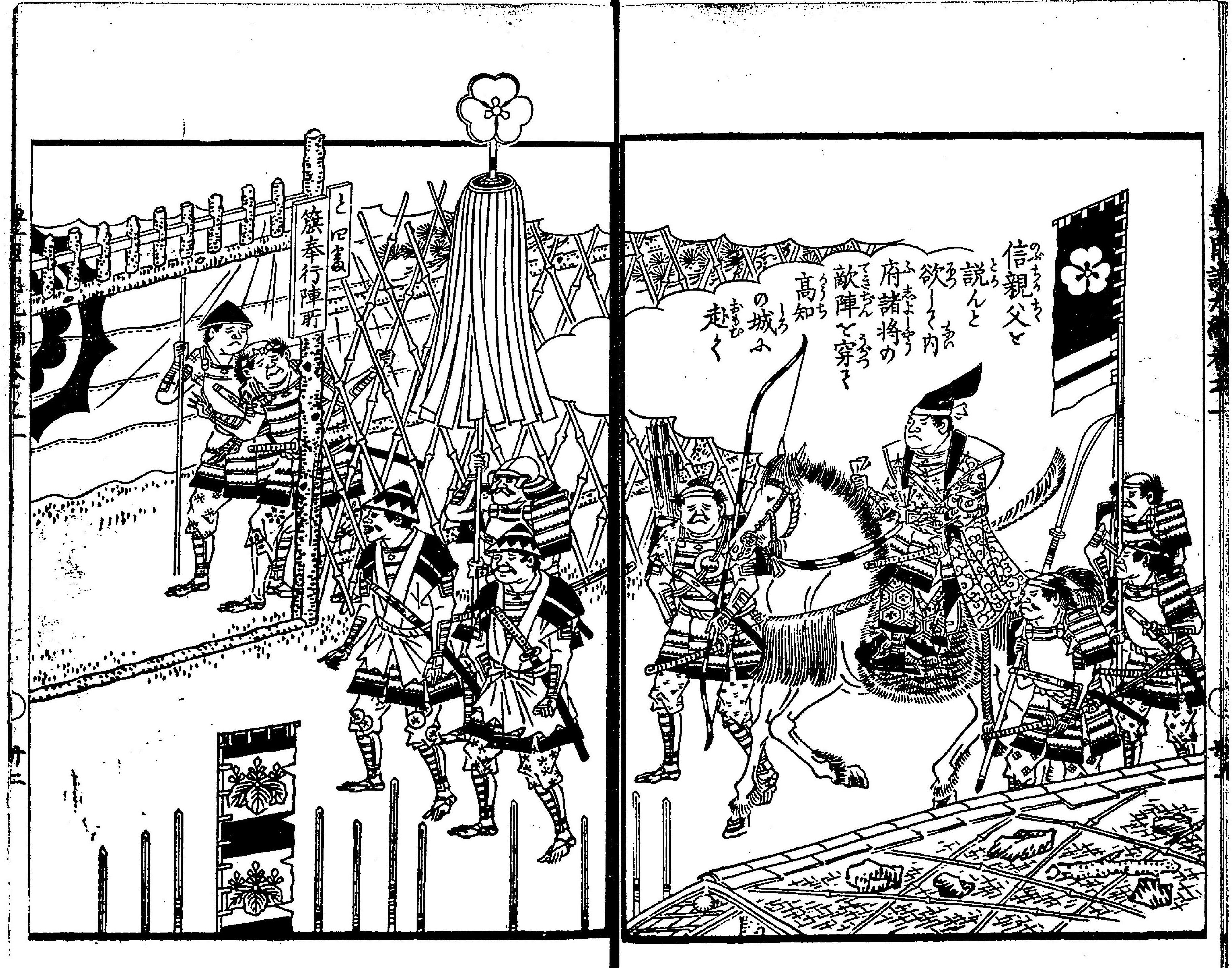
方の虚とも窺がたし。天下に望を懸るものは十分ありといふといへども。継斗の融徹ざるもの。其十分といふとも可ならん。軍彼波足しられん後撃て発ることもなく。涯岸峻岨をよく牢固て。國を守得うとはもえが。加之吉川。小早川等に豫召を屠取るゝられ。さながら小児のをさふるに等しく。島田。浮田が讃岐を攻れば。大風前に万燈の。吹墜さるゝに異ならず。両々阿波に入時は。薄氷の日に朝ふが如く。大将南海を渉りたまへば。虎に向へる羊に似たり。忽地土佐を巻却せられて。今は全く這一滅に逼着らる。對する自方の高知はあれども。其なる半は攻取られて。唯甲丸のみ孤立せり。此期に迨で元親の令

數巨石の下の雀卵たらん。足下武勇に矯奢して。即今山下に斬て出る知の城の路を開て。父を救出べとて。生を遂べき術は絶たり。父を死場に誘ふを。孝義の道とは謂るまじ。子たる者の至孝は。國家を持ち身を安んじ。先祖を祭て子孫を續系図を断ざらしむるにあり。今父楯下に至り及で。孰が命の助るべき。万将共にこれを誅せば。天下の從刎なんぬべきを。吾君寛仁大度にして。先祖の功労を懐念まし家名を絶さんことを嘆ちまし。且は降人及十義兄弟。徳居江村を先として長曽我部掃部佐の。嘆願したる忠義をあはれミ。我を得く是をさきま。其の理解を聆しめんため。從使たらしめ玉ふなり。侍と此理を含

得せられて。土佐一國を領受あり。父元親に説示し。國家を持領天下の補佐となりたまへば。忽切天地に報ずべし遺言意中に愊ひながば。蚤く聆諾こそあらましよ。備る所存にかなはぞば。吾首到て憤懣の。懐をまつりて終るべしと。理非備りたる述るにぞ。波座の個々息もせず。目と目を觀合をなりにて。酒に酔たる如くなり。有係の大将信親も。忙然として一句もなく。感涙とゞめも敢ざりしが。大息ついて涙を拂ひ。扨も〱驚却たる市正が言諭。夫が鉄石の心懐を。碎くべきもの外はあるまじ。今演らるゝ道理の始末一々もつて至極せり。さもるの子も我快より。知らざるにはあらざれども。唯止なとと

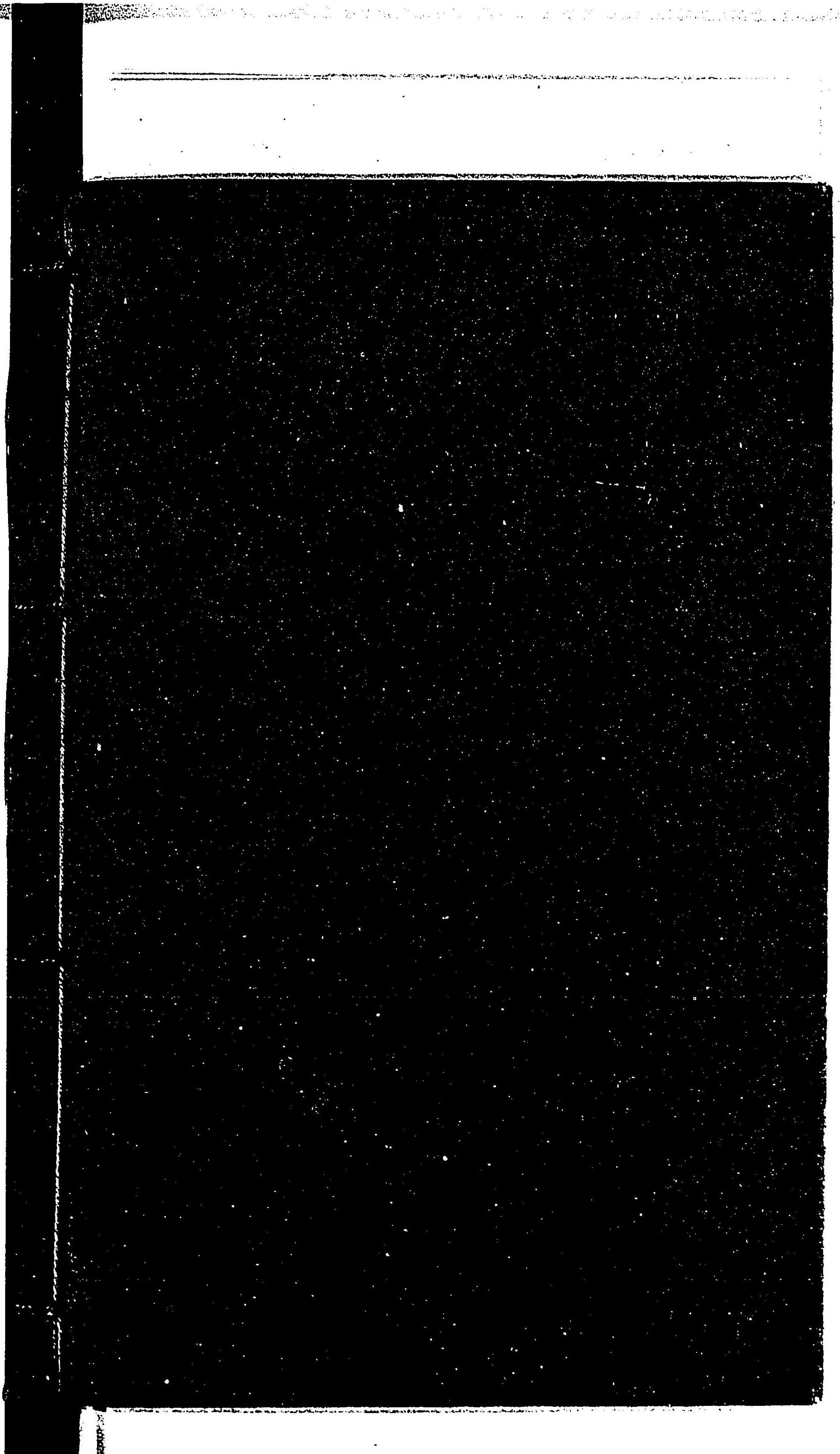
得ざるがゆゑに。今日までも足下等と戦挑む所あり。家國は謂ばさるなり吾儕父子の身命は。決も世になきものなんぬめりと。期と覚しゝる者なるに思ひもよらぬ今の從命是とれもへば秀吉は謙にく天下の仁者の一人。四國に埋居俺們が。勿く及ぶ所にあらず。それに仕ふる家の臣士。片桐市正が利害の條々。山とも動かし海とも乾さん。吾心魂誠にもつて屈服せり。子として父の心を斟酌は。不孝とも謂つべけれど。吾今即時に自ら知えいへり。諸将と議して父を説べし。もし説得ずんば死を倶にせん。此座の諸将はうにぞやと。訊に諸将詞を共にし。御念にまでもはうんば。御父子の身に恙なふ。仁義を

施しまふのころ。土佐一國と安堵なさしめ生捕たる掃部頭まで。助命しまふ時料理面目ありて最有がたし。従來忠義に戦死せし。金子入る虎の諸勇士も。負見主家をたもちつれば。草葉のかげより嬉しくなん。決く父君と勧めまふて國家の安きにいたらせまへと。なくなくと共にまふそにぞ。信親らさねて且元に嚮ひ然ばおもより言知にいへり。何分父に利害を説存亡と定めまふをべし。亞ては掃部頭とえじめ。諸捉们と一個も残らず。這方へ帰しまはる條お遠なきやと強て問。且元詞と正しふして。武士の演説せし詞におひては。日は冷に変ぜるとも。這事いらでらお遠あるべきかなあらぞ。心を頼らひ


旗奉行陣所
信親父と説んと欲して内府諸将の敵陣を穿て高知の城に赴く

玉ふな。御安途あつてまさやかに父と諫め玉ひねと。ま
ふさに信親が頭なし。誠に天下をたろしめされ。内府の臣
家片桐の大器感ずるに余りありとて。心中いよく帰
服なし。是より大に酒燕を催し市正を饗応して。送礼あ
つくぞ帰しける。片桐且元御本陣に辞返り。城中に彼の
始終と。精しく言状しさてまうされバ。内府大によろこび
玉ひ。その功労を賞美あり。黄金作りの太刀を賜り。速地
に諸陣へ徇られて。大坂より高知までの通路をひらき。
信親を通さるべし。通しすらバ素の如く。守衛厳重なる
べきよし。令属られたるにより。其方の諸将承受なりと
て。御従の如く行ふなり。這時弥三郎信親ハ。諸将に大坂
の城を守らせ。其身ハ自勢百騎ばかり。率て高知に向ハ
る。其路條なる羽柴が彼列厳重にして塵隙なく。軌則を
整し礼儀を紊さず。迎送丁寧なりたれバ。信親いよく
心に感じ。高知の城にぞ到られる

絵本豊臣勲功記九編巻之一了

19?
90
254

197
90
25 a